古今
奇談

蕓白冊

上

古今奇談莠句冊第四巻

㊅吉野猩猩人間に遊て歌舞を作る話

好き人ハかんせぞやと賞し花の山とましけんと羨せし詠とめて花
なんとて其境に臨みて花のさかりや乏しや八誰も眺望の忙しきま
邊をとられ其塚をとひ分ぬに或ハ雲とやまかるべきとそよ人の
此面彼面の花を見て無興なるハかんせぞやの人にハ悲ぶくし右また
に山水の吉野一りくまらず山の山かりに向よづき吉野こそかよ人
の始まり去ず邂逅り花ハ神の代より芳ひてさん芝茸ろりのこそ
に雨卓さるより異糧を書ひましさるもおんら蔵井すらるね八什
山中の様にハあらずこそ奥の花ハ一時ならず咲ハちり散き六さく
らと口号ありハ近ごろれ花えなりむりしの林藤路ハ象谷より里
きに添ひ曲り登りて今の金れ寄居まそいるりし其間谷の序側を

のぼりくだりてめぐらるゝん。南朝とまうして輦路彷彿用ひ。軌道
日よりも早よ。たゞも教深よハあれど。水よ除める勝地ハ文瀧西河よ卓
尼し本源ハ巴ゞ渕とゝ。ゆゝ出て山を環まる水の咽んで流て
潺くれ音ハ耳と伝ゝ。川上の徒流皆ゝよ海て遥よ紀よ
達て。峯中よハ急流の流瀑布の無るもの多し。金乃岳嶽の
名ハ地主金峯の壮ふゝとゝて学よ。いたゝゝ密厳成就の地
と標して石ゆも拂ふべゝゝ。ゝ古くかゝゝ作ゝ樹の木立いゝく
き連て峯がちなる乃を深くゝ分入ゝ。ゝ俗乃ゝ。西ゝ来れ
バ白の渡るわゝ。ゝ流よゝ。の水ゝゆゝ。ゝの石ゝゆ
いつくゝ。近くるゝゝとゝ。ゝゝ。山乳よ育ハゝ。怪獣珠含
出谷よかくゝひ大首ふして馬尾あり。鼠ハ磯よ踏べく。髮被ゝと
る同ゝ斜ある眼光ゝめゝハ。ゝゝ義経の乗ゝ拂ゝゝ仙と

あり。はありて岸よ斷崖ゝ。ゝの深さよハ測ゝる出ゝゆ乱動
幻のごゝ。むゝび年経ゝゝ世を歴ゝゝあゝめ
ゝ。ゝ球ゝ風を含ゝゝ。ゝ青ゝよ怪獣あり。駭て倒セバ風
をゝて包ち魅る。古昔禽獣れ拒よ備をゝゝ。ゝ人を攫て本
よ掛ゝゝハ大鷲ゝゆあゝし。それゝ功油ゝを壓て頂巾載ゝ。條掛
被ゝて。護法よ役せられて後ハ。人を傷ハゝと悟ゝあゝ。ゝ学ゝゝ
突ゝとゝよハゝあゝなゝ。ゝ深ゝゝ蟒蛇擒ぬハ金乳を厭ゝゝゝ。ゝの霊
あゝ神仙の宿ゝも徒よハあゝずゝゝ。文武の神振山ハ勝れ上よ襲ひ。
又回ゝゝゝゝハ天瞻よのゝんぬひ。日義れ望の岩窟ハ岡又山よ列ゝ
ゝ。此よゝゝれゝ身の行れ渕の西ゞ。在五西河の幽窟よ仙ゝゝ。ゝ教良
旭日乃邃窟よ脱裙ゝゝと。倶よ昔ゝう俗作ゝ。都盤ゝゝを炼ゝ。轉
乗法華を励ゝ。中院谷よ忠信ゝ骨を彩ゝ。掛援塔よ義経の名を

捧く。因位の弓技ある沈陀れ宮を苔の滴水よ炊き。静女の妙技なる法
樂の舞と縹織の中よ奏す。岩余の躍路。雄略の行宮ハ花の乃よ辱う
せぞ。平城七代ぬ帝家願を垂ぬふ。名區異跡を敕して探んとせバ法
で来る人も倦やまらん霊泉奇窟ハ修験の九穴と敕よるのこなるず。
晴窟ぬ殺を遡ぐき多く。潭土の難災城ハ拙ふ。允そ泉穴乃事ハ土れ
穿くるよ起り。又金ある山ハ必ず壊あり。人智の逸きいつを始と知ることな
しぬ城山ハ護良王乃技ぬひ宮城ぬ行宮ハ建武年を累て拙ふと
なるこ中殿の位ハ當時の宮ちを摸しくうとゆバ。紋祥の法陽う
司百て加階湯ぐし。此の庭ぬや孫を結びて政我頭ちる。山鳥あり
りの八逃林よるかうと呼て寥しさきるる我還幸と逆へ安て耳を
收バセ一大宮人の感慨深く。そのらこ紙を殲すれ敵を遠ぐ。此ハよ
迫められぬる震襟さそとらひやきれ。世ぬ中ハうやとかう

そめ小駕をとぶめらくもうて百の司も備へさせぞ。礼儀とぶめくう社
て行幸もなく。亡我の軍計のくなれバ。佞てれ家の記も敕ふるま
でうく。宣国ぬるねてちこ云佞くくる中よ。護良王れえぬもうしよ
歯を咬まぐる人情の情ぬをれ世をぐさ。後村上の世時初和歌
といよ文女あり。芝八挑井玄常の一族よ右馬以とういよ人石川の加
名生の寺よて発ん一ぬる時。一人乃むすめ我吉野宮中よ宮侍さ
せぬる。生乃聡さうく父ぶ膝下よて彩く奥じくるいさくらの白拍子
をもかぐく舞それバ。和和ぬとハ乃きれけるぬ時よ芝の高よて。
山宮の姫ようぬ侍して弧舞よ妙よ容貌端正よ音多農姫ふ
て。幽情無語よいうて八笑人破枕之よ堪へぞ。傾城の色よハあらで。一
さび乃ぬりの必す玄ぬこ我さ無度ありぬさくく人心をむくて
ぬりぬ酒を礦ぬる法をりて。水景能適ぬて。和和弧才能あるくよ

英州侍續編巻四
英州侍續編巻四

遠ず爲の義をなしらば互ひにむつまじく常に御遊のかざりとなり。彼海のねり出さるるハ不くづうたゝめども民家までも甚敷れ行ハきてんぢくまでの歌のものとかせり。此句のやさゝ八幼少の時又ハ裏して出る羽の羽ぶれ下ハ年経て。近さ邑ハ俳優の俳業ありて里民を技を練そ。それをなひ深く。淫語ハ色を劇と いふハ俗名にて。扮演ハ拙を生似るなり。唱ひものるて勇健よかるを発科と同じ。打諢ハ笑ひなり。態度ぶりを舞と云。倜曲逸移れ次ハ白あること皆漢劇の雅あり。身の挙動ハ指と収ると左右のこゝをゝ早く立く狂く迷く後くもるとさきれくふおほく多くあり。御欄の羅れ左右の肩ハ見紙綿ハ故あるべし。我てくゝ態ともあるハいさゝ邪情なけきバかくはもるなくん凡出ル太鼓ハ奏てけくず笑ぶもるハ鼓吹のこうてこそ。女ハ言短女ハ面を伏て起居易直なるべし。妻女ハ分寡ばくくと敬あるて動作粧辮あり。妓女ハ言ハ嬌羞なく。笛くまでふして常ハ歩ハねるす。老人乃拳動ハ老嫗ハ渋じやもく。少女の進涼けきバ児戯を出す。上ハ承るとトハ臨むと記ハ緊放あり。凡場ハ上て八形態を変化ハ変べくくなる。凡搢ところハ俳劇ハ実情ハ考へ出すを且ハ。アとをれども。度をきバ本末を考へ作も技義いまゝ拙られバ人の笑ひ恥へくを情ハ念ゝすも出す。態ハ行て動人魂と。まめて息を用て生を思ハ拙てあさ笑ハ無をまれ一ハ。ハくくし。角力ハ速ハ脆く負ハるを勇ハ人の手力ハ強さハ弱ハ強さも無せくふて。凡我ハ手ぬ徭ひもの義きと辭するハ狎狐のまくくし。ハハ入翔せ。を撫の歌ひを喬へと命ハ。ハを結末の須歌ハて言ハ我先ハて結ぶ唱ハ遊

れ修ぬんとぞ。さら只態を舞と狂言との分なり。笛を遥
に延て吹出されて八舞扇ずるもあり。二段ぞろに責を打八席を使
なり。態をもつて出がくくして。又謡曲八囃合を失へば行ふ法
かのごとく。彼暫者の唱へ山伏の花見に扇おつとり刀さいてと使う。
弱法師を妖霊星と号ぶるに八あらで。田楽の家にてよくひが言と
なりて常に かく徐なりしし。絃八あれど身に絃くハ乙に悦び
雲のごとく。穿て其の動く八物に移るべし。俗劇八男女混用を老旦
戎武生に用ゐど武生八男優のすなり。和田酒盛の五郎八剛生なり。
小袖の又郎八軟生なり。又狂言を下ぞ乳に上すといへ
ども。誓約の言と発作の勢ひ八對まれ面を乞と見るに冥さあり。
袖をゑす事八男優八おもきまでこさに軟生八今もするあり。神几帳
してふりくるる臉の。志ぞ〜傷き八映まるでさ。こめざれ八外情

かし。芸も昔八水干の袖を自ら づくるあるを。今八袖長くても被
くすに土方に流て一同ぬあり。唐劇八鬼形に虎面を用ふ素面
ふ虎班かくの類うの。男女れ脚色共に雲肩あり。剣を執て追ふ人の品と
らくて刺んと〜逃るの胸を護して顧く。東技八わきれ呀ふ頬を嗤
う〜。西技八ぶるに口を開く。扱又舞者の執てくぐす扇をそぐく翳
といふ。凡のほぎをさ戎態とい袖の字と混じやすきよう。戯場
束を結んで鎧技の人を催し出す物のを春牘と名つ。辞もものこと
久しく生して。其の編て歩れ正しくぬを蹶きふく表ひ返る乃
拍子あり。楽家の作人ありて。世に弘舞を行てる加八主人も舞
妓もやる所あり。勘袖に八達をべし。妓色を貪ると術と。主人乃抱
席を抱くよいて。客を以く賓客に供ると八敬りも背ひ。妓も無も
うるうるして晴に八用る所なるべし。静ら産安義して程あく。志

人心もまがれ曲んも及ぶべきにあらざるべし。さてあらめれてこばなるべしと。是を以て折ふしかうぶりをうけ。正平の始足利直義。無て高師直が勢威を畏れ。和を左右にあぐ。密々に南朝へ内附せんと志す。陸辺の国々に成次ふたりて中入をすれば南方の諸大将高師直疑を抱る。左るに正行ハ。其無て間候をうに近来宮倉と執事とお和ど。鉾盾を交ぶ。後日の禍ハと思ひ今年の時を待あらめ。密々とあきを許して心底を試さんとあるふりして降を乞せれ。熟考ぐて邸宅のはたに及ぶ。もられども直義ハ解べきにあらざれば。和朝の味方も忍ぶれ。始終よん城配り陸辺二郎を使へて披露ハ石堂兵部と仮名して。有りうる人物動作宮も足利の連枝。人ハ平日の態度にて。人々ハ驚ぶ。

南朝方にて。大塔宮ハ最後きで。抱使嗚ヒ一人あり。石堂と云ハ直義が後ろ手ぬとさぐり。伺て。伐ち内奏して。武士に命じて多くの謀罪せるべしと。許へ求られれば。腹心の文武を召て内議せしに。近臣ハ後ろも納ぬも互に計策を尽し。究めるを不ものハ高恨を爽むの時にあらずとや。結ぶ。

南朝方ハ。罪を報へて恥をめて。胸を居ることを。奏せる。忠臣ハ。悔ハ南朝の一人。伐ぶ。折に觸て席に臨んで言葉の根ざす一節ハ。拳載に及ぶ。大義協なり。

漢代の末つかた。曹の昭烈の時に。許褚と胡潛と中郎。公事に協ふ。令じて。行法を乱ひ。指さ。備ハ大令れ席にて。を抜優せしめ。考へ。あれば。是に。勧ひて。と和。余ハ。脇の

御樹の能技を催さる。齣劇三場のまゝ徳さるる躑躅ヶ崎の書り。新曲を作り係て。戯名我探宴と称し。位ち直義を服の役直義の慈り用ひ。和孫子の方を拵らしむ。こゝ言れば。執奏せし越智を以て降人の對侍せし。誠智の外れるなれば公道背あたりと思へど。是ハ新系乃心を探り又ふとそと新郎よりて角と演技を。直義も色こそ大事あれと。の見なき体まで。かく一勅を寄せるゝハ。包ども改よ。こゝ已り高亟の係包畏るれ和あんや。ようぎをされ不勘なるは衆英の第ひを蒙ぐられども。武兵のすりあるねば。狗る取りあるべとは文中ける。標の卿色已り役合宮うされば。渕辺よ旗奴を拵らしむ。芙ハ村上。一場より高杉左司の淨。立よ名和氏を称る。和孫よ暴を学べる。宮姫民家の女子等。二十四人を用て。散きハ書の衣忌托垣代よ立しむ。暴盗よハ故篠塚乃女子保賀の局撿行を。父の勇力を稟つぎて武器あり。預め号令して。戯文より遠ふとおくバ狭の杖りて一百打んと。義しき容やかなる流眄よ又やるハ。花の下よ緑て電光よおのくん地をゝん。裘の内なまぶも。端殿より狩辺の内麓を塗て。表の内桟敷設け。文武班列よ沈て次第も。絲竹金鼓ハ幕の内よ測し。第一よ守屋稲城軍の衣掛樗。第二よ西國落の静舞。第三関已よ沸り。第四よ暴して。躑躅ヶ崎乃旗与ハさやひある抱ふ色バと。上下同を拭て行よ祝そなるれ。

躑躅城旗與

あかぐ踏る淡なる子。ゆれも因ゞあるさきゆ子。拵ぐ一名ハ山路よ正つるをもなくいやらくそ。扨も我遅たくるくてつゞゞ城係ちかくをまで到を素ぬるゞ。師傅ハいまゞ素くぎるゞ。忍いやと只今迫つてなりて。塔くは係ちくは手うゝへ。を拵く

る農家の中にハ此前れたるを芋瀬の庄司が塞ぎて落武者を擁
ふところて。君も己も修験道ハ立ざりしめ達ハ。山伏におひてハ不足なる
く別義あるまじくいへども若くハ敵が君を取こめなる時。某一家と
なり。計略をもつて此跡よつぎきて救ひまゐらすべし。又密か故なく通
しまらバ後まてりとも某をも通し申へくとなんいへバ。義照ハ此所
またゝめらひ。此後より参らんとかるまてハ。かゝる大切の際に臨んで此傍
を離れまゐらすハ。何ごとかくゆりなくいへとも。此免を蒙るべくなん。我
らぞ師傅類なくまつ。我に遅しむべからず。惜くまりハ荒んやさや
此辺の奴原縦るとも何程の事かあるべき。今ハ我を遅れ給ハんさらバむ
かひいべし。いかにいぬりしや。錦乃此旗を此に停めなする。八大丸下乃ぬ
原此幟をことふみべき挽うと。云もあくまで旗竿よ手鉾搭まハ。旗奴
ハ旗を放さじとすまふを旗もろとも中に挑げ。傍に障る大の

男我らひ抓てはなよ許擲らちやり。此旗もぎとり肩にかけ左の
此弦追てかの怪力勇気ぞめざましき。武略の程ぞめざましき。庄
司ハ是に肝を化し。擲隠より走り出て背をみせりくめが
きせども。われハとはをたゝさたるまでにかうことなして。ようしく我に
損益なし。彼が随をまゝしめよ老ども八遂つで遊へ此年も来る
年も。庄司ハはすそと舌を吐き遊へき義勢ハなかりけり

同

擲宴

吉野といへる邑の名ハし。君来まさぬさかざしりや。是ハむかし建
武二年遠倉の土牢にて直義に弑せられたまへる大塔宮に給仕せし
皆々んと申女まては。最前此處につじが塚を築て相模入道が大
軍を乞なひし。岩菊が家んに落されて村上義照此名を残たり。
つじれ死を悟にして立腹切らるを辺りの再び読蹕れとぞまる

土地となり。かぶとをさうれ昔ハ菖蒲原乃雄よ倣ひ陸奥の国栖の巻よ
ゐう。今ハ義帝の恨よはしく。よく漢楚の業よ移さるさしも世
よにたぐひなき足利の連枝。高氏の落ぶれよ肩を壓され衆を悔て後う
ゑうもうもうもう大名諸じ大酒進るとて。舞ぶめをめ
しひぢとハ乃あれハ舞妓のゆうよて来うい。扨いうめ乃設
けやゑはよはめく今来う。彩しよ移る邸の門千筋引る白沙を右
たよ来ひとる。遠よせの板ゑ屋く。大紋よ風を含めし郎等のく
つよ立づる簪除く一筋引ける幕よ入る。客人の数ハ彼くぞ。小畠
よ吉ふ三木一茅ハ能土居も揺よ。磯ハちさ樟ゑ時よ来る
花の宴彩ゑて麿くのハ酒の巻ゑ扨ねゑずいハ乃うくハ進め
ひて席をハ抱へうれうとねうひい。山海の珍物をハ地をのるふ
いくハ酒くも器のかぎうたうへいぶし。彼ゑある物数をゑれ引る物

よ来うんふぷひ白拍子ハ行とて遅さそ左ハ只今来うハが。物乃数
れ附る揉敷よ入くひ程よ。端の座よ移ハせ歪い。伊条抜く出し
ひへ。畏う。敬生バ雲ハ曲めハ孔の岩よ立て白ひも色も行うせん。
あゝ不奥や。席よ移んで烏帽子も捨て。袋さへ被きて振うぶた
るハ伊の揉敷で。ゑこそ和殿が命して害しする。大塔宮のいまを
れ来ゑ来ゑてあんゑを。抑ちの牢とかハ地を堀下して板ひさし。
月日の光ハくハバて。郭多の湿乳よいさうはくうずよろバひ移
ふをゑひうけども刺す刃敷ハよ嘶て咬砕き。憤怒の焔を吐て嶽
しぬ。猛男ハ相忍ろしく遮しくて。身を縮く拍も笑くさ
ア。を朝命ゑもあゝで私曲の勢よたのゝずや。直義ハさゞ面を仗
せ言づき汨の出ぢそ。ハ言ハ却る至れ法よ出く泡よ。足利殿
乃を姫。於の詩くゝ。ちゞ丹波路さて模ぐしふ方弗よる拳執

ハ。足歩までも蹴殘られ。直義まうも面を伏す。名和乃長氏客の座
よういうよ白拍子。蓋ふさ注事を沈んよう孫しく今掾を辞じ。
殿ハ友軍最初の忠臣舟の上れ行宮よ家と身を去きてる拾折の
門ふも。初つぞや赤松一黨の領をづき戎模よ勾う朝家を離し。我
ようと与へて泛つる。家兄の計策ハ第よ出て蹴殘られ。稚よ兄弟
将家れ計畧を失ひ。内乱を通てけ朝へ。形勢ハ傾るんぞせ漫う貌
れを多う兄弟よつて蹴殘られ。是ハこぞ家事よ及びい皆外よ
王推尊の恵言とない。名和ヤハかる上ハ何を隠しなちん。とて
もれ身ふいハ。侍首勾る渕辺を言れて。その時のはるさ母と今掾
よ責て。かひるさしまてんヤしくそいハ。性脈よいうて。直義麿を離
を一新の果まで勤づきなれども。此時分ハ為させ内くと年寄れ言をのづ時。侍分
乃局徒杖えなほ。ふく打んとする眼ぞ。ちろしく。やて戯摩つきて。

渕辺を石ぞてもあくいい。年寄つきくいハ宮久しく土窪よ住屋乃
和内ん地拍打ハしくとてせめよと承う。性髪を剃らせたま
ちくはん地をしくとて。渕辺よおほせて性髪剃寄主と
ひよしを落しろるよ内ちやくもかきつるせめひて。性力ハ強か
ろう。せん方尽て渕辺ガ牙を脱ん乃不為なるよ。はて一洗
えまれと寄ちぐひちるとヤして言語道断。そ時迷よ領和う遂
ヤう塾居ヤつけてひくいや伺猛よ新をかぐりひとも。渕辺ら眼ハ
徒ら飛ぞや。朝家の頼を偽せ宇さ大境文を空して。形んを振
ちん下ひ。楚人の義帝ふもまさうし眼を振しめ。性えハ徒
と蹴溪られ。直義自ら罪を知りひ。今ハ宥させおハしませはる今
今ハ懲うヅ散ぢてそひくぞ。殺くぐし九童を御して一まよ
を寵ひあふるわハず。是え来宮乃足利よ及ろハ悪九性内

忘ありたれバ。足利よりも恨めしきハ敵愾なると常に独りごち
給ひし。人間の穢なかりぬさへ悟むまづるの時乃変その日の味方ハ
明日乃敵とハ知らざりし。君が為法機揚げおほせず。生を殺し仏罪
を守ても臣等の迹ハちるちるつき。実是よりハ今ある礎れ楯と寺
アゝさらず竹の太夫人ハ花に独りくらしき根が嶽ハ色もときぬ
宮多の冨士れね接ともたらず我来京し此れ其のあけぼの。さやゝさ
日つきれ家居ゐる
直義面目我掩て兼収まバ衆人宿き懐ろ一旦に散じて去るとも直
義のさざかさき拙からざりしを称義す理りある直義際りある身を用
ひして且ハ小抛へありれ少く為に石堂と仮名をるゝとるらん。近臣花光
二郎と云ふ者経綱容貌似たるを初より假り乃形代として其の身ハ右京に
八郎として末の者となり。かゝることも我ゆゑとも知らず南朝人なりしと云に
籠ひ縫りて邸をさかりかる正行ハ僚人の色をたすく不ばし又給ふ敵愾と申
しかバ彼も太夜の君ありいかゞ答へると倍観せしが其難態の遅く対ひる
ふ本人にハおそらざりきと。直に我名と共に新邸にいでて其の仮名せ
し石堂殿に面せんと申に。直義もつてこの名の乃出て対面し動て
見て当議のかく。英雄の断機を志くぬるがおその執念き。かしこく
も実に宸あらしこゝらぬ代の軍肉ハ既に理あたり正行謀らずき軍務
れ為は来らゝと南朝の軍制を詳く告て刑として以ことも庭に下
て的を射ら。直義なる人数持ちるハ我にまさるものなしと絹をつけ
て云。日月を雲く新田殿様にハあくとも。我よく的中せバ一どびハ宏
軍れ帥を編らん。正行云。小臣能的中せバ公とちかく上軍に帥た
らんと。對し射ることまたく。かしてこれ中をぬいて退く。出る時臨て
公の今来りハ容らず滞留あるまじと云。直義悦びて私の後に所

直が強梁をかくして進退を司る。正行云。公ハ北方よりかへりて威勢を包て
待なく、近年に師直必ず数万の軍を率て吉野南に向ふべし。我戦
ふて死生を決せんとす。先公の領する西播の地ハ人勇に案内もちり
し。是を加勢に出さぬ工夫して此朝の忠に備へ給へ。師直死せずとも
軍に打負なバ勢権衰ふべし。勝なバ公の家いよ〳〵安かるべし。此時心腹
の一族を尽して此朝に移し参り。正行に代りて軍府を司り師直が
害を遁給へ。己が一族の遺りたるあらバ。公の忠勤を視て其指揮に従
ふべしと云。言の理あるに服して。此ねがひ薙髪して慧源と法号し。
北にハ師直が驕ひを散じ。時に当りて身を保つ乃妙計とし。南にハ謹
良王れ幽魂を慰し。三年の後跡を遁るの張本とせり。頃て後に和泉
乃お許ハ和田何某に嫁し。篠塚乃局ハ楠正儀の妻となりしとぞ。
時に高階の執事威権都鄙に赫くたり。随従するもの其局の容儀

ありて妙舞あるを傍へ坐て是を聴て其兵に仕へんとて。日比閑者を
南朝に給ひ入らしめバ。その中てり盗ミ出しられん。是を守国に掲て該の
山路の間道を急ぐに。吉野の武士逐来りて途を遮れバ。京へ来らうとも
郷ひの兵卒数増て既に斬係るなんとす。かくまて一語も出さゞる
尊の局楽の内より颯と飛出る其状。紅梅の小袖に赤き袴の裾を曳
て鳥のとまるが如く。さしも岩上に蹲まり。席に向つて我を征祀とする
に怪ミふして怪しを知るべし。世の人ハ何とて我性情ハ志らねど。その
あハせて知る人ハ志らしめ。赤髮を被られし素服せる彼猩々ハ公所の母なる
そりの八海島の野人なり。磯うつ波の音。芦葉そよぐ風なりて八蹴ろ
ふべし。我ハ名山の春秋に愛て幽棲乃君王を慰めんが為に此地に遊
息すなぞ他人を慰めん。今日こそ我侍る限りも棄てんとえたり。我方
れ人こきさいの文つも能く語して年比値偶の恩を謝しめん。此気

色を窺ふことハ蓬が島の遊びをく。出厨より已ゞ礒せしに酒ハ。山宮の
瘴気を除き寒筵と悟るべし。安〻と下臨してんしきれもぐ
巳の心よかしこくも法望せと中ゝて。翡翠の書發名ち紅鶴の絲
我乱し。そゝく飛去て冥〻と笑ふべきあゝね。南兵ハ系家の間
者を遂排ひて。後り系り叶中を逆し笑ゝそう。是をなん吉野程〻
とやゝでさ。彼山ハ秀霊の萩海なきばかるゝ

⑦ 大高何某義を厲し影の石を賊を射る話

南朝ハ元中九年。北朝ハ明徳三年の冬。南小和義倒てそゝる又十六年
まて一統す。然るでも小朝の主も君臣治〻す。多〻りあるゝ妻じて南
方ハ高家遺恨散せず。能堂時ゝ起ち。一統の後又十三年。小朝乃文
安元年小いゝう。きゝ望流を奉じて蜂起し。西南の主ゝ号ゝそゝる
こと已ゝ七年。法方の武士来う流りの日ゝ加りて。勢ひ系代ゝそゝ系ハ

そ屬國ハ貢把。水ゝ深く陸ゝ勢じてあいきる。伊勢の後裔系政ハ多
乳類ゝて冨有のそゝえありしが。先朝よめさきて出花りゝるさ
きゝるそ子兼次系向し。先朝より倍重れる米粥幾ぐく城上
納し。行ずバのゝゝハ南ゝ元て後より幾らも石されいとゝ
小一朝派ハしく先例ゝ依て年人佐と石されゝる。保昌ゝ命ゝ系ゝ
きゝひ系ゝ却の幾振幾勝を敬じ来る。そ能法拙。先代ゝ接げさ
る例ゝきゝ。そゝて進てセゝる程ゝ。味方の法士もいさゝしくそ笑
えゝる。南朝柱石のゝゝる摘正勝ハ合戦の時。文正儀ゝ別立し。系
正元ハ京ゝ入り仇を刺んとして遂そ忠死す。そ後ハ十津川ゝ入て
已ゝ四十餘年。此時ゝ及て老を極むといゝども。能烈を失ハず。常居ゝ
系向して衣と共ゝ無復を計る。又大工れそて後ゝ國親として。匠材の
上そゝるゝ。皇宮の法人を器し。粮んとて来りられそ。そゝるハゝ

ねどもかく面かげあらりを移せられんとて庚午の秋小瀬といふ所
ハ要害よ帝居を經營しける。小山の庄と称されどその地ハ釈迦岳を西
にうけて。東ハ勢乃飯高へ僅よ近し。帝居を造られて後ハすまよ京
て京家の人々そ相なれくぬらんと思して。集り仕ふるものもかなら
らず。造営成つて三年あまりの後間島三郎兵衛中邑五郎次郎ぬ人
森て知音の仏ふよつて隙を請ひ本国を守む。其わけよ。是ハ二人が侍
来の主人石見左衛門が本意なり。石見ハ本赤松満祐が家人なり。赤
松旅人の謀よかゝり。北方まて出身の害をなし家を起こことあたハず。
南朝ハ一方ならず。血脈を一つも任せ我ぬ人を奉侍せしめ身
ハ北京よ在て南方ハ名よ間者をなさんと。兩なれ趣を南帝ゟ可とし
て。そのうえ義のりたゞよしれ例もあれバ是を納んと諸士よ任せて正
勝よ謀る。正勝熟思して下ハ謀よしめり乃時ハ我朝擁勢ひあ

ありし今日乃襄へ行を頼て北方の被官志を傾けん父正儀が在し時。
河内よ居まずら北方よ降りしも。君が世も家代もつきしと姑踏を
嫌めるおりし。さる必ず拒ぎらるへと存られども帝ハ偏よ人を好ん
どましまされ時なきハなつけて識ことよ善信よ準ひ玉ヘバ不日
よ両人南朝よいたり日勤仕り他事なく北方大小乃挙止日夜よ告
あつて奏達を第才幹ふして上の旨よもかなひ忠を尽すとつん
ぎんある。正勝が許へもそのを同ひ謀り下知を受け。卿家忠を勇る
ところなし。正勝も是を副けて常よ語る。或時中邑云。侍へ吟執手の
先云ハ。張良が傳へられし三略肝要あれ一枚見ありひて武略要語
ふと承る。主人石見幼少の為よ是を授けよ。身分よも片端を承
ま仕へき承。此禄の事も北朝まさハしく傾きなるらん今國
をはしくして忠勤をなつ。其大略を授けなバ共よ朝家の益ともか

ろぐーと世をもんひ入てゆーふぞ。正勝云。今同一の味方となりて。身
を公えうること秘すべきなあるべし。ちう〜光華も必竟ハ忠信を繩墨
ふしてゆを用ひざれば。本刀をもて戦ひうちても。其刀をもて勝ゝとあ
たハざるがごとく。魂をもてゞ者ハ用ゆ堪へど。安ゆ韜三畧ハ七つの書ゆ
教へ入をられど。孫呉傳ゆ軍法ハ今日戦ゆの常ゆ別さるゆ勝ゆ拙
おし。張良ゆ黄石公ゆ授ゆる三畧といゆハ。上中下の三計をもて三ゝび
来ゆとして遅速急の三つ我。平旦鷄鳴半夜ゆ至て如此なるべしと
説示し。を時ゆ南りゆる主者の師とあるべきを退の為務を辨
す。本朝のむりゆ入鹿れ臣を傳んとして。孫呉公拙学ゆ托て南閻
先生の所ゆ。送迎の路上ゆて潛ゆ大ゆを計られし。皆密事ゆて
一人ゆ洩ることあり。今和殿ゆも授けきるゆあり。凡て事ゆ臨ん
ていハ上中下を定むべし。先下の策ハ許多二の忠を尽さんとられた。

新系なをば〜任用せられず。小朝ゆハ此国今の拔西山深く攻
撃の及かゝさ我憂へ。百ゆ忠の者を以て此朝を傾けんとする時か
をば。猛毒ゆ人変じて。新ゆ我投をりて小ゆ陷るの志業ハ。其身
れ生死いまゞ知べらず。或ハ毒を効として。主人の敵を殺さんと欲
すゆも。元来赤松叛逆の罪ゆて面を出しかたきゆ。叛逆の所為
を功ゆて。前の罪を免されなんとハ。国ゆ不忠をおかるためしそ。
後必ずそれゆ倣ふものあらん。其故ゆ執達の人ありとも。云是わ
ば。労居あつて納ず。却て罪名を辛ぬべし。中の策ハ目今新系の初
念を変ぜず。石見伯ち赤松の配子と云ゆ来て此国ゆ属し。此朝
れ皇運ゆ応じて。世を一統せハ勿論。和儀御ゆも。愚臣ゆ為ゆと帝
の行宮をる所ゆ従て。禄微あるといへども赤心の士ゆ教て。元人の
罪名却て主事ゆ移り。孫後世ゆ恥ることなるべしと。明白の利害

聴居たるに肝魂も亡くなりて答へもえせず面を低しが。ざらりと心を張て
何事も気なき挨拶して論縢を開かし。今方の上策ハ如何と
問に。正勝云。上の策ハ元も言かし。中邑も必なく弱く吟んと希ふ。
正勝云。是悉く八耳に入るまじく存までもなき也。今紀勢河摂の
間に此頼へ内志残属する大家二三なるにぞ皆模積のものを使て。和殿
家人乃進退を見聴て。小方に流言せしめバ。主人までも禍ひに及べし。
其時罪を免るゝ兼ての方便ありや。たさなくハ急に召ひ立帰るべし。
家人倍臣とやさらでとも赤松一族の末なるべし。急に播州に行て
赤松満則に従して彼を味方となして。近く山名発向して満則を
攻つきよし我に告せり。此時我山名に従て攻る体にて満則と心
を合せ戟を返して京師を攻き也。己ハ河内の畠山をかたらひて宇治
小栗栖に出てそこを攻め。東乃里見原田に檄して同時に旗挙さ

せて。鼓躁の勢を張らせなバ。八幡れ室居赤松をくし。満祐の血脈政則
の家を起すハ此時なるべしと。分配の速なるを頭上より丸を立す
が。やされ計策に。間じまじとして居たるを。正勝又云。是ハ日残雲しく送る
ぬ上策なりとも。播州に従事難義なるべし。たかしハ狐に化をおへ
るに似たれど。小方へ便りを求めて此土地の撰残あらくに
因ておくり。好時節を以て告知らすべき衰にまでなりて身を
全くする是上策なるべし。中邑を射られて後の解説あらバと
探りきたる言を。それとなくして感嘆の体に明断の志ある不遜り居
兄ども覚悟せまつしと。千歳万歳して退き出づ。正勝是を副て彼二
人を外事の勤役に取用ひ内事にハ用ず。二人も新参なるがハ漸くに
るべき事とぞ。同司三郎信儀の供抱にさそて。事を正勝に
許りの事の序なきハ悉く笠置の御没落此時より。武家請取事

る神器粉しく。是ハ武家の誉ぶべきことなり。君の御身に保ひ給ふ德あるべ
こと。是ハ命を奪ふ仁あり。神器のゆくへ。朝の百姓ゆくへ知ぬ
て。皆身命を奪ふ仁あり。神器のゆくへ。朝の百姓ゆくへ知ぬ
ば。分量を計。撰び初んとする京家の人よりて秘をぐられ。嗜方も誓約
の人に非ざれハ告ず。去りあるべ四の富有を知ざ者ハ有るべ
と。長府よりいざるひ。一つの名を取出し。是なるべ是を神璽ともいさ
ハ。ひるまども。宝家の二寶ともる地人有の地ハ朝乃授所とそ
天皇乃兵害。大敵の撰に非ずとゝ。人の知る所人ハ伊勢の國司
先代の高家。海を隔る四国皆高民なり。新ト是ハ法内の土地
に是ゝる家の子あり。皆壊墓を枕とするの志あり。有ハ伊勢第ふ
と。祇察に命じて論を敗て同らしめ。此度守磯弟兼改ぶ一紙千
貫の流文。一紙千懐れ券子教授第に充ゝ。此三寶偽ずして良

亮ぶ才あるとも戦ふことあるべ不ず。狡兎常に三窟の計をあし。乗人慢て
兩頭船を踏とれ疑あるべ。去ハ武家を踏とハ人民れ好む所よりあり次
とさとる。間ゆを時の度さに疑とさ。四世の將材乏しかずと称歎
す。秋津さ長者。此所の婚記もあく十六年に及ぶ。時に南朝乃
元中元年ゝ。六十九年正月二十九日。日輪東に光りて二形を成ぶ。
時ゝて一形ハ漸ゝに消失て一輪とある。正勝奇なるふると人とも
て。天を仰て皆歎ぶる事教授。已めるふ已めるれと。ぶ一言で
ふく此光ゝ。伊勢尾張海辺に生ぶる笑て中ぶ。是を我辺
に十八日法と名づけ。法面ゝ人ゝて八。是を義つと同ゝ者ゝと
あり。伊ぞ大將の吉ゝとあゝん。正勝伊乱ふく退きて。腹心乃
一族に使ぶる八。九月朔の流ハ古今一なり。只時の地乱ぶぶふに
つて堅を吳ゝ。彼海辺ハ山もあゝばあれ。我ハ山中に是と入る時ハ

帝土の奥廻よりかるべきう。日輪一つうして山ゝを流し。野ゝ原あり。
今為れ日の出ひ出るや。そ一ハ映じて侍るるあり。侍るりの遠よ
潮して一よ及しるハ光新新裏へて善新さらへんち。望遥の敬ずべ
き原なりと深く憂へられども。味方れ軍威孫悟けまバ。ひとひ手る
るよ知れど。軍務よ務きくおるぬそ。その内。正勝久しく小畠殿よ
強うられバ。彼よ申音信て時の変法して遣るついで。河端の正盛ら
宅よいるうて。そ青ハ此よ歌富らべしと。腹巻ときて見と伸しけるら和
島よ鎧よ出て。唯鎧を着ゝよ。ごるる猛よ弓引の矢尖低きく敷
を失ゝがめ。いぶりて見必す城堂を使ゝを切るら。或ハ大切の仇を脱
きたしもるらと。ゑよ正盛よ告て見せ。む。正盛ゑるよいさら常よ
ハいずゝ。此星のゆゝひハ遠ゝ。ゆうよ見ゝく。そさるら南北の天
あり。翁の国ゝて遠ひられと。正勝ゝを振て云。今此辺ハ国乃外。

朝儀よ無ゝず。南朝の天文室よ入べうゝ。我国よのゝ遠ひ見あるは
尚ゝ深切なる不のかゝぐうゝ。ゆゝ。ゆ去れ南光さへんぐうあるふ。近法
鳥合の衆軍新条の孝多うきバんあるしかし。こゝて安逸して明
日を待バ主職よ為ることあるうと。ゑ時よ発兵し。微弱の浅者ゑ人か
きバ。人数を後けゆくと。国司の方へ人をいて告ゆ。主況十分人使
道とえて。東川よ向て馬を弛ゝう。実よ間為中邑ハ林窓を奪ひて南
帝を失ハんと深をうゝ。正勝兼てんえて近侍よ内属しぬ逆
ゞ。其使宜をうゞず。南帝兼て逆のかゝ家よ潜幸ありゝきゝたわきど。
正勝よ帰うてためゝひゝとと久し。此時彼が家よ居うゝる孫ゝて。下
格ゝ乃後流ゝさでよ名のうて。遠う遣ひふうゝ。比ゝ住花人等よ
ゆゝを命せられ。戎服石され女ゝうよ帰して庭をゝせゝ。あゝ国取
よ外交在す れ殿の方ゝう。中邑乃為出まゝう。此報を家人よ負せや

系。南帝陛下に向せのみは。あ人樂乃ゆるさわうて。明る八時天より敬
禮ひまん[illegible]を。只今ほど北より告知せひよう失神寒をかく
してこそ[illegible]を迂しまるべさと。諸しげ奏されども。ゆれ讃院より
かんをかけ。ハ卒より樂をろうさせゆ。あ人劒をふり供を乃樂
丁を追ちひ。南帝のれをを捧を。左右よう[illegible]て二三星ざうも時。
南を我ハ囚をとハなりぢ。こうに命を停ると宣ひて[illegible]して[illegible]せ給
ふ。今ハとて中邑勿辨るくも[illegible]。衰
さうふ南龍の南ふあるや。こうるこさせ給へ。小朝乃長[illegible]五年山時
十二月二日なり。樂丁ら叫びよびくるふ武士多く出て追まう。あ人をや
らぢと取らこむをのぐ色〳〵て今ハ身もつ是れ。系の石を後干よ
どうて大[illegible]よいよ中う。我ちハ小朝の命あうて南帝を退治して降
るべう。仰う後日乃罪を知ぢやと受て。京家の人れなす有。高[illegible]

ようせうひて明らの答なるべしと。[illegible]人皆後日を顧るをは大高
恥ふ命あるりの。人別ふ義信あり。を日よく起て田をうんよりんとを
る有ふ。人殺し知ると叫ぶ聲耳ふ入り。[illegible]ぎ弓矢たぎをまつを
ひ来る。来なる大石のおよあ人あり。只今貴人を殺せし仰して。龍衣
は甲を弱ふ[illegible]ハ南帝をおすふ遠ふしと。衆を麾をて[illegible]
たかし仰ふ。明る八明日の義あり。今日八を日の義あり。暇れあうふ入っ
ふ思んやと引きぬうて一人を射る。胸を毎して一箭ふ斃。[illegible]
中邑なうる物勢ひうるざる我人て。まるれ衣甲もおきて京邸
みてのうれ去る。矢法遠ざう是ハ鼓をあし人を集め。大高丘よの
ぼうて云。東萩京の先ふ一隊れまる人ハ我方武家の様あり。必定
こて今の一人ふ行多ぐし。此ふ屯して。かくの時ハ往来をいまし
め用心せよとて[illegible]ず。正勝ハ熟路を[illegible]して挾谷の北よりろハ。日ハ

よりて弟まさり。向ふ方より肌具足せし男一人来り。正勝が一槍を又て。横ざまに通んとするを下えりして投へさせるまに、はざるる体を高なり。果して作野伝を起し逃るを追ふ。又城を停て益なしと。郷鞭を抽て走るを追ふ。芽茂撲つ。殺さるゝを、同者の反対すなり。弓張強く引て血を吐かず。匍匐逃去てふようる。正勝已に狭谷に入る。新主の寡を見咎て大に怒しを。大高が義男を称賞し。棄る衣甲ハ不日に留めて。城を封の後記となさしめ。礼をなして神野谷の陵に葬り。帝居れば仏院王住山に祈福して香火を奉ぜしめ。我身ハ再び十津川の奥に隠れて遂に老を送る。南北一統ならしはに入つてハ十七年。是同明徳あれども。於後勇猛ごとあり。諸葛忠武侯薨じて蜀漢治安二十九年の久きにいたる。其高武侯の徳を知る。南方意元の保不久しいなか。石見が立功の様をも兼て苦辛を用ふる。大高の時に臨んで義に進ぶる。成功論ぜんハ。只是遇と不遇と深きハ異なるあらんしし

古今奇談英句冊第四巻終

英州府經紀卷四